

「続く感染症との闘い～グローバリズムの真価が問われる」

山陰中央新報掲載（2020 年 4 月 19 日 1 面「羅針盤」より）

東京双松会 毛利信二副会長（北高 27 期/理数科 6 期）

新型コロナウイルスの災禍が見通せず、生活だけでなく社会・経済にも不安と沈滞ムードが広がる。政府の新たな経済対策が少しでも安心をもたらしてくれることを期待したい。

ヒトからヒトへというこの感染症の世界的蔓延は、改めてグローバル化を認識させた。最初に確認されたとされる武漢という地名に、かつて強大な秦に対し「合従連衡」を模索した諸国の一つ

「楚」の中心的都市を浮かべる人は少なく、初めは、彼の国のローカルニュースとしてあまり気にも留められなかったはずだ。が、そ

の後、数カ月にしてほぼ世界中に感染が広がったことは。感染力もさることながら現代のヒト・モノ交流の広がりとスピードを思い知らせるとともに、グローバル化の潜在的なリスクも露呈した。

中国は、2010 年に日本を抜いて世界第 2 位の経済大国となった。今や世界最大の輸出国、サプライチェーンの中心的存在、そして米国の対外貿易赤字額の半分近くを占める国である。安全保障政策と密接に関わる IT 覇権争いも絡み、トランプ政権でなくとも米中貿易対立は先鋭化していたと考えられている。

その米国を含め、これだけのグローバル化に対し、感染拡大の前から世界の主要国はナショナリズムのうねりに身を投じているように見える。これを近代史の必然とする見方もあるが、東西冷戦が終結した際には「歴史の終わり」と言われ、対立勢力がぶつかり合う意味での歴史は終わったと見られた。

しかし、世界ではその後も様々な抗争が続き、しかもちょうど文明間の断層で起こることから「文明の衝突」と評されるようになった。そして、それ自体がグローバル化の果たして反動なのか。明確な解の見つからないうちに。国境に壁を築き、経済同盟から離脱するなどナショナリズムが先鋭化し始めたのは事実だ。

イギリスの EU 離脱は、反米主義のフランスのゴーストに思想的淵源を遡る共同体とは相いれないものもあったのかもしれないが、経済と移民の問題だけで判断されたことは果たして正しいのだろうか。こうした問題提起がイスラエルの歴史学者からなされている。

グローバル化の流れは続き、世界はナショナリズムでは答えきれない課題を抱えていると彼は訴える。端的には IT とバイオ技術の融合は雇用や生態系などに深刻な影響を与えうるし、地球環境問題、



核戦力などグローバルな課題にはグローバルに対応すべきというごくシンプルな主張である。あたかもパスポートを所持して国境を越え蔓延していくこの感染症にも各国が共同で当たらなければ、ワクチンの開発・普及を急ぎ、社会や経済を不安から解放することは困難に思える。

それまでわれわれにはなす術もないのか。このウイルスに対して今のわれわれはあまりに非力で、まるで戦力に圧倒的な差がある戦いを強いられているかのようだ。しかし、攻撃手段が乏しくとも抵抗し続けて「負けない闘い」を貫き、最後に打ち克った史実はいくつもある。

その闘いをするのは、国でも自治体でもなく、われわれ一人一人だ。クラスターを作らないことから手洗いの励行に至るまで、自分と周りの感染リスクを最小化するためわれわれにもできることがある。一人一人がこのウイルスに抵抗し、負けない闘いを続けて行きたい。